

木の中を流れる音を聴く

椎茸半栽培と山仕事における兆候と沈黙の予察

- I 木の中を流れる音が「現われる」 時,場,人
- II 視座1 兆候を束ねるしるし—数値と知覚
- III 視座2 沈黙は過剰な兆候に耐える技—判断の生起
- IV 兆候と沈黙



面代真樹 OMOJIRO MASAKI

樟舎 ksnoki.org

島根大学・寧夏大学国際共同研究所客員研究員



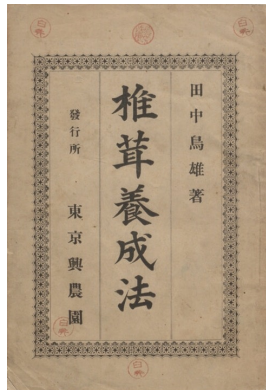
木の中を流れる音とはなにか 音①^{しる}記しー記録

明治12年(1879)

島根県編纂『椎茸作方摘要』

<https://dl.ndl.go.jp/pid/12641252/1/>

中村克哉『シイタケ栽培技術の史的研
究』東宣出版,昭和59刊 所収



明治29年(1896)

田中鳥雄『椎茸養成法』

東京興農園

<https://myeu9a.short.gy/E1amwn>

東京大学農林行政史料アーカイブズ

明治36年(1903)

檜崎圭三 [大日本山林会第十六回総会における講演]

<https://dl.ndl.go.jp/pid/12641252/1/211>

中村克哉『シイタケ栽培技術の史的研
究』東宣出版,昭和59刊
所収

昭和49年(1974)

大庭良美『石見日原村聞書』

未来社

<https://dl.ndl.go.jp/pid/9572711/1/165>

薬師寺惣吉(明治9-昭和47)が昭和37
年、87歳で語ったもの。



平成3年(1991)

桑野功『大分椎茸栽培の言い
伝え』平成9(1997)改訂

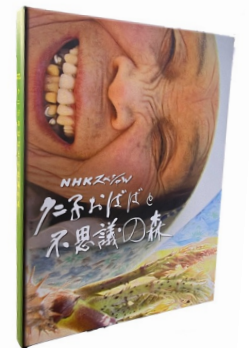
平成23年(2011)放映

NHKスペシャル

『クニ子おばばと不思議の森』

制作:スタジオエイシア

DVD発行: NHKエンタープライズ, 2012



音②-a | かたりー水を見る

ナバックリは十一月三日の天長節のうらひら（前後）に水を見る。

腰鉈を木へさっと打ち込んで耳をすけると
ジュウジュウときれいな大けな音がする。

昭和49年(1974) 大庭良美『石見日原村聞書』未来社

<https://dl.ndl.go.jp/pid/9572711/1/165>

薬師寺惣吉（明治9-昭和47）が昭和37年、87歳で語ったもの。

*18歳で津久見から島根県柿木へ。22歳で染谷多三郎のもとで先山に。

音②-b | ことわり—現象の記述

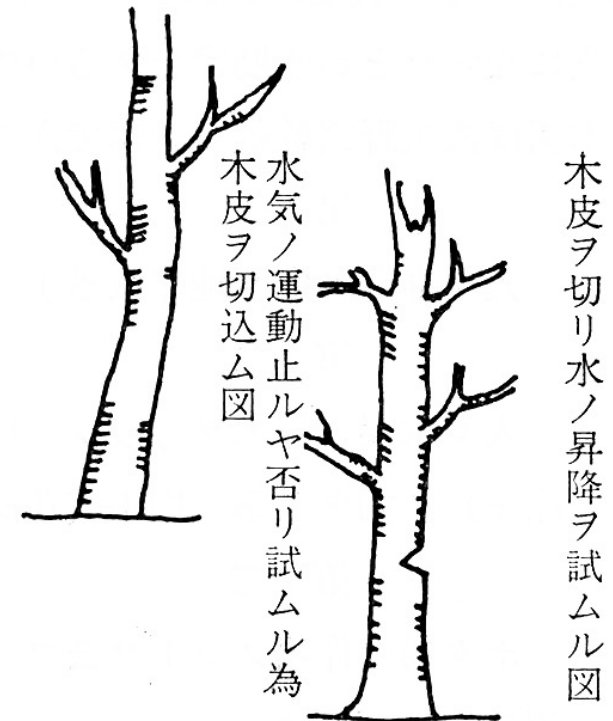
右図ノ如ク木皮ヲ切り直チニ其切りロニ耳ヲ附テ之
ヲ窺フニ樹中ニ潤アリテ自然音アル中ハ

水ノ運動止マラサルナリ音ノナキハ止マリタルナリ

明治12年(1879) 島根県編纂『椎茸作方摘要』<https://dl.ndl.go.jp/pid/12641252/1/>

降霜一、二回の後、黄葉の見え始むる頃、立木に鉋にて伐り込むに、ぱらぱらと四五葉落る時を期節とすべし。右の鉋の伐口に耳をあてて、静に聴く時は、じいじいと水の下る音聞ゆるるものなり。其より十日計りの間を最上の時とす。

明治29年(1896) 田中鳥雄『椎茸養成法』東京興園<https://myeu9a.short.gy/E1amwn>



音②-c | はなし—言い伝え

そこに耳を近づけますと、ジュウ—ツジュウ—ツという音が。最初に聞いたときには、大いに感激したものです。

木切りは、鉦目の水の音がタバコ一服のときじゃと聞いとる。くぬぎの木の樹幹に腰鉦を打ち込んだ。鉦目のところに耳をあてて、音を聞く。「スパツ、フー、スパツ、フー・・・」

平成3年（1991）桑野功『大分椎茸栽培の言い伝え』改訂平成9（1997）

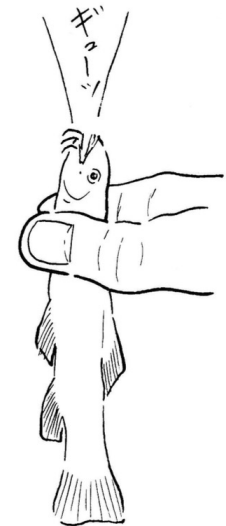


図-2 ドジョウの一口鳴き

当時南海部郡本匠村森林組合の専務理事高野繁さんから聞いたものです。

木の中を流れる音とはなにか 音③^{あらわ}現れ

椎茸栽培技術の'要'として, 移行期に'現われ'た

時代
植生
用益権

天然採取

⇒

半栽培（自然栽培）

⇒

栽培（培養菌接種）

有史前～昭和20

元禄～寛政～天保～明治～昭和30

鉋目（刻み） 樹種転換

栽培者

移動する民：炭焼き・修験者・木地屋・茸作・椎茸作 → → “出稼ぎ” 鉋山・土木・商業作物（茶） → 農山漁村の生業

薬師寺惣吉

「秋になって木の葉が落ちたり枝がとまったりすると、水のあがりさがりがずっと少なくなる」

ジュウジュウときれいな大けな音がする

樹木生態学/植物生理学

1. 木部樹液流は、日変化・季節変化する。
2. 秋には葉の蒸散活動が弱まり、木部樹液流の日変化も減少。

切断面から木部樹液が滲出し、空気が巻き込まれたり、木部繊維・樹皮との摩擦音が重なった可聴音

5db?

聴く必要がなくなった

幻聴？

聴く力が衰えた？

勘違い？

「音」は、誰にでも聴くことができないものだった。

真偽ではなく、場、人、時を探る

そんな音は存在しない？

慣れれば聴こえる。

聴こえると信じていないと聞こえてこない？

惣吉は「きれいな大きな音」だと

半栽培・山仕事のなかで

かたられてこなかったもの

記しーかたり・ことわり・はなしーから読みえないこと

ここからは「**記し**」ではなく「**兆し**」から、掴む試み。

記・標・兆・徴

「記し」の手前にある言いよどみ、比喩、言い換え、逸らしからも。

A. 宮崎県東臼杵郡での聞き書き 令和7年7月

B. 島根県松江市での聞き書き 令和8年1月

視座 I

兆候を束ねる

7秒という数値の機能

椎茸栽培

T氏

(76歳)

“7秒”は

しるし

楔

実際は目で、山全体の色づいている具合を見て、もうそろそろいいかもしれないなということで、山の中に入って、何本かにナタ目を入れて、樹液の上がる時間を判断する。紅葉がまだ始まったばかりの頃は11秒から14秒ぐらい樹液が上がるんですよ。幹にナタ目をポンと入れて、耳をあてて、時計見ちよってですね、そうすると、ジジジと上がっていく。**7秒ぐらいがいいんですよ。**でもその時期を過ぎるともう遅れてしまうことがあるんですよ。だから7秒になる前の状況で倒していくんです。**7秒っていうのはもう限度なんですよ。**遅れて倒すと葉っぱが落ちたりする。葉っぱから水分を抜くことができなくなる。それがあると困るんですよ、椎茸は。水分を抜かなきゃいけない。

視座 I

兆候を束ねる

7秒を取り囲む兆候

椎茸栽培者T氏のなかで、7秒は数値として、兆候・経験・教えを束ね、とめおく概念

葉枯らしが完全にできて、中の水分が抜けて養分だけが残っているような状態の木を使うんですね。その時期がちょうど紅葉が六分紅葉ぐらいまで。見た目でいうと六分紅葉。**それが7秒。**

(晴天が4日～5日続く日の中日がいい)。これ難しいんです。でも、2日天気がいい日が続くか、(このあたりでは紅葉の時期にはある風がふく、その翌日) そういう時には、クヌギの葉っぱがこうやってしぼむんです。閉じるような感じになるんです。そしたら、もう明日倒そうということになるんです。

(昔はここでは) もう紅葉具合だけみて判断してたんです。もう椎茸を一生懸命やる人たちが集まって研究した。それが、ナタで傷をつけてやるやつ(水の音をきく方法)。

視座Ⅱ

判断の生起と沈黙

特殊伐採I氏76歳

考えられることを
考え尽くす

一瞬の判断は一瞬
で生まれていない
⇒長い思考の末、
結論を出さずに待
つ・保留する

判断の前夜ーひそかにみる

頼まれえと、ほんに心配で、やっぱちょっと気になって、2、3日寝つきが悪いけんね。

絶対失敗は許されん。絶対。失敗したら、自分が死ぬか、人を殺すか、建物がみげえか、電線が切れえか。

近くでしたら、何回もひそかに行ってみて。いろいろ考えて、それから3つぐらいアイデアをだいで、いよいよ切るっていう日。別の考えがぽっと出たりなんかする。

視座Ⅱ

判断の生起と沈黙

判断が生成する場は、他人の言葉や視線や存在によって乱される。

ひそか = 私を確保し、対象と向き合う時間が必要。

場の関係のなかで、兆候が結び直される場を壊さないための構え。

沈黙から立ち上がる一瞬

パッと、わかるって、いろんな学者なんかの研究でも、よー知らんけど、なんか魚釣りかしたとっただかに、ひよっとくるもんだらしい。だけん考えんと、そげなものは出ん。

だけど、（当日）あの、いらんことをいうやつがおるわけです。こげだあげだって。で、ある程度聞いちゃらなあいけん。（それも大事）

俺はまったく違った考え。やるようになったら、瞬間的に、もうファファーっと。すると、その通りに。

山仕事。繊細な精神にこそなしうる仕事として今なおある。それは、椎茸半栽培、特殊伐採を通してみることができる。そこにあるのは「力がたえずその上を移動して平衡をたえず取り戻し直しているような表象」である。

「兆候の場」ともいえる。その場に入って何かをうる技。動態をとらえる技。木の水、葉の色、風、湿り、地形、人の視線、危険、過去の経験、当日の時間が、互いに動きながら関係を結び直している。それは言語化できない。けれども、まったく表象できないわけではない。そこに「7秒」や「二つ三つのプラン」が打ち込まれる。これが楔・徴＝記＝標である。